

# 野鳥たより

—北海道—

第 27 号

編集者 北海道野鳥愛護会  
発行者 北海道国土緑化推進委員会  
発行日 昭和52年3月21日



アトリ 札幌市南区真駒内曙町で 昭和52年3月1日 撮影 森 拓人

# 円山周辺の鳥

## 5年間の記録

羽田 恭子

### 1 はじめに

不備な資料を公表するのは、少々恥ずかしいのですがシロウトの強みといえましょうか、凶々しさといえますか、片手落ちなことをしていても許されるような安心感、つまり、専門家ならこうはいかないでしょうというわけで、いうなれば、開き直りの精神でこれを発表するわけです。

まとめたり発表したりは全然念頭になく、あくまでも自分の楽しみのための探鳥でしたが、まとめてみて自分なりの収穫はありました。しかし問題もでてきました。例えば観察回数のばらつき(表2)です。この月はどうして行かなかったのかと日記をめくれば、家の改修をしていたり、病気があったり、また水鳥を見に石狩に通っていたりしています。理由はあるにしても、もっと計画的に歩けばよかったと反省します。

また、観察回数が次第にエスカレートしていることに一人苦笑しているのですが、これには理由があります。初め野幌森林公園で鳥を教えられてから、野幌に行かなければ鳥に会えないような錯覚で、お膝元に円山というすばらしい所があり、繁殖期には朝3時に家の窓を開けると、居ながら鳥の啼鳴が聞けるということ(実際カッコウは3時から3時10分の間に鳴きだします。私の家の付近で8時頃寝ぼけまなこで、この頃はカッコウも聞かれないなんていう人は、カッコウがひとしきり鳴き終えた後に目覚めているのです。ヨタカ、トラツグミにしても夜明け前によく聞かれますし、オオジシギは夜半ズビヤク、ザザザザーを繰り返しています)がわかってからは、まず、「足元を見よ」というわけです。

それにしても不定期な観察で、時間も家事の合間であり、実のところ、鳥の方が気になって探鳥の合間に家事を片づけていたようです。家から幌見峠、おりてきて、円山、神宮境内、円山西町と7時間近くも歩くこともあれば、「円山に登るも強風でだめ」などと記されていて、早々に帰宅したこともあり、不備だらけの調査ですが、あとは、専門家の研究を待つことにして、このつたない記録が何らかのお役にたてば幸いです。

### 2 期 間

1972年1月から1976年12月まで、5年間。

### 3 観察地域の概況(図1参照)

#### ① 北海道神宮境内

中央区の西部に位置し、面積約180ha。境内はスギ、ヒノキ、アスナロ、イチイを主とした針葉樹、また札幌の桜の名所としてのサクラ、ウメ、イタヤ、ミズナラ等の広葉樹も多い。神殿南西側は、針葉樹と広葉樹の混在した鳥の環境としてよいと思われる林が続いているが、昭和49年の放火事件以来、柵が設けられて入れないのは残念である。天然のハルニレもわずかに残っているが、通常歩くことのできるコースは、天然林より植林された所の方が多い。

#### ② 円山公園

神宮境内の東部に続く円山公園は、面積70ha。坂下グ

〔図1〕観察地域略図





円山西町側も標高 100m まで住宅がたち並んでいる。

#### ④ 円山西町

円山の南側と動物園西側、幌見峠にかけての山間地帯は、風致地区住宅専用地域であるが、昭和34年、私がこの地に移り住んでから18年間の円山西町一帯の変貌ぶりはすさまじい。世帯数だけをとってみても、昭和34年、100世帯足らずであったものが、52年現在、733世帯を数えている。人々は緑多い自然を求めてというより、標高が高

く、地価の安い所を求めて、ささやかな住宅を建てたものと思われる。その間、オリンピックによる道路の拡張、斜面を切り崩しての宅地造成、樹木の伐採等が行われ、夜は動物園の猛獣の咆哮しか聞こえなかった静かな山路も、信号のつく道路となり、幌見峠に至る山道まで簡易舗装される状態となった。しかし、住宅は敷地も広く、各戸の庭には、樹木も多い方といえよう。

図1に記した×印の自宅は、標高 100m、円山と神社山の間を通して北には遠く石狩湾、増毛の山々が見え、東を見れば、野幌の百年記念塔、そのはるか奥に、雲かと見まがう夕張山系も望むことができる。(絵参照)

なお、神宮境内、円山公園とも、冬の積雪期も、主要道路は除雪されている。

図1に記した×印の自宅は、標高 100m、円山と神社山の間を通して北には遠く石狩湾、増毛の山々が見え、東を見れば、野幌の百年記念塔、そのはるか奥に、雲かと見まがう夕張山系も望むことができる。(絵参照)

#### ③ 円山

天然記念物で、鳥獣保護区である。国有林(47.78ha)と市有林(13.6ha)を含め円山と称している。標高 226m、簡単に登れて、山頂からは札幌市街が一望に見渡せるため登山者も多い。また北登山口にある新栄寺に参詣し、88ヶ所に参拝する信仰の山としての登山者も多い。林相は、カツラが多く、ミズナラ、アサダ、シナノキ、エゾイタヤ、ベニイタヤ、オヒョウ、ミズナラ、センノキ、オオバボダイジュ、コシアブラ、ツリバナ、ユリノキ等の広葉樹が多く、針葉樹は少ない。狭い面積の割に樹種が多く、都市に残された貴重な天然林である。しかし、まわりは宅地化され、通称南斜面、双子山、また、

#### ⑤ 幌見峠

標高 270m、峠に至る山路の両側は二次林であるが、センノキ、シナノキ、イタヤ、ドロノキ、ミズナラが多く、ツルウメモドキ、サルナシ、アズキナシ等も多い。これらの実は、野鳥の餌となっている。峠を越えて盤溪川までの両側は、伐採跡地に灌木の進入がみられ、それに続く左右の山には、カラマツ、トドマツ等が植林されている。51年西野から南9条に至る北電高圧電線設置のため、幌見峠から西町にかけて、鉄柱四基(基部25m四方)がたてられた。

#### ⑥ 円山周辺自然歩道

円山の北側から動物園と円山の間を通り、藻岩山にぬける起伏に富んだ自然歩道であり、探鳥路としての距離



〔表1〕 円山周辺の鳥類

○は自宅庭で見れたもの、又は上空通過で姿を見ているもの  
◎は自宅庭で声のみで確認したもの

科	名	種	名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	自宅	備	考	
ワシタカ		ミ	ゴ													○	→75. 1.14 家の上空通過、場所、時期にも疑問をもったがミサゴであった 76. 11. 28境内上空を手稲山の方へ飛翔		
		ト	ビ													○			
		オ	カ																○
		ハ	カ																○
		ケ	ス																○
ハヤブサ		ハ	サ																
		チ	サ																
ライチョウ		エゾ	ライ																
キ		ジ	キ													○			
シ	ギ	イ	シ													○	幌見峠と盤溪橋の間でみられる ◎ 幌見峠から盤溪よりでみられる		
		ヤ	シ													○			
		オ	シ																◎
ハ	ト	ア	バ													○	幌見峠で営巣		
		キ	バ													○			
ホトトギス		ジュ	イ													○	幌見峠でよくきかれる →家の庭でカッコウのヒナ、モズに育てられる 73.8.8~8.14		
		カ	ウ													○			
		ツ	ド																◎
フクロウ		ア	バ													◎	75.8.23 円山で幼鳥2羽確認		
		フ	ウ																
ヨ		タ	カ													◎			
アマツバメ		ハリ	オ													○			
		ア	マ													○			
カワセミ		アカ	シ													○	76.8.8 円山で幼鳥確認		
キ	ツ	ア	イ													○	→72.5.20 庭に飛来。年により声の多い年と少ない年の差が大きい →円山でも確認しているが、75.10.17 家の上空通過、神社山に着くのを確認 自宅には、72.1.12 一度だけ飛来		
		ヤ	ラ													○			
		ク	ラ													○			
		ア	ラ													○			
		オ	ラ													○			
ツ	バ	イ	バ													○	→円山小学校に営巣、円山山頂ではよくみられる		
		メ	メ																
セ	キ	セ	キ													○	少数冬季も残留		
		ハ	キ													○			
		セ	キ													○			
		ビ	キ													○			
ヒ		ヨ	ド												○				
モ		ズ	ズ												○	74年は冬季♀残留			
レン	ジャ	キ	ジャ													○			
		ヒ	ジャ													○			
ミ		ソ	ザ												○				
イ		ワ	グ																
ヒ	タ	コ	リ													○	→4・5月は声のみであったが76.10.13 自然歩道で♀♂2羽確認 →庭にくるのは毎年早であったが76.12.1 幌見峠で♂確認 →円山山頂でみたのは一度だけ。よく見れるのは幌見峠から盤溪よりである 11月に見たのは脚をいためた個体であった		
		ノ	リ													◎			
		コ	リ													○			
		ル	リ													○			
		ジョ	ウ													○			
		ノ	ビ													◎			

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	自宅	備考
ヒタキ (ツグミ亜科)	クロツグミ													○	
	アカハラ													○	
	シロハラ													○	
	マミチャジナイ													○	
	ツグミ (ハチジョウツグミ)													○	
(ウグイス亜科)	ヤブサメ													○	
	ウグイス													○	
	エゾセンニュウ														
	メボソムシクイ														
	エゾムシクイ														
	センダイムシクイ													○	
(ヒタキ亜科)	キビタキ													○	
	オオルリ													○	
	サメビタキ													○	
	コサメビタキ													○	
エナガ	エナガ												○		
シジュウカラ	ハシブトガラ													○	
	ヒガラ													○	
	ヤマガラ													○	
	シジュウカラ													○	
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ												○		
キバシリ	キバシリ														
メジロ	メジロ												○	幌見峠で営巣確認	
ホオジロ	ホオジロ													○	円山より幌見峠に多い →76年から家の前の電柱で転る。それ以前は みていない
	ホオアカ													○	
	カシラダカ													○	
	アオジ													○	
アトリ	アトリ													○	冬季も少数残っている  75. 12. 3 円山で一度だけ  72. 11. 4 庭のドイツトウヒに5羽飛来 72. 10. 31 円山公園で一度だけ
	カワラヒワ													○	
	マヒワ													○	
	ベニヒワ													○	
	ハギマシコ														
	オオマシコ														
	ギンザンマシコ														
	イヌカス														
	ナキイスカ														
	ベニマシコ														
	ウソ														
	イカル														
ハタオリドリ	ニューナイズメ													○	
	スズメ													○	
ムクドリ	コムクドリ													○	冬季も少数残留
	ムクドリ													○	
カラス	カケス													○	ハシボンより圧倒的に多い
	ハシボソガラス													○	
	ハシブトガラス													○	

- 1 幌見峠と円山公園間は、直線で3km弱であるが、標高では250mほど差があるため、それぞれの場所をわけた記録が望ましかったと思う。
- 2 観察不足のため、周年いると思われる種がある時期記録されていないものも多く、今後観察を積み重ねる必要がある。
- 3 74. 4. 23 神宮境内でチゴモズと思われる個体を観察しているが、確信がないので記入していない。
- 4 75. 5. 25 6. 17 6. 25 ホトトギスらしい声を聞いているが、一声であったり、姿は確認できず、記入していない。
- 5 75. 3. 3 4. 3 幌見峠でコガラと思われる転りを聞いているが、姿は確認できず、今回のまとめに記入していない。



は短い、渡りの季節には多くの種類を見ることが出来る場所である。動物園と円山の間を流れる円山川が護岸され、自然の水流でなくなったことは、野鳥のために惜しまれる。

#### 4 観察回数

繁殖期や渡りの季節は、円山、幌見峠での観察が多く、冬季は、神宮境内、円山公園、円山西町での観察が多いが、これらを含めた観察回数である。

月年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	
1972	2	1			1				2		2	1	3	12
73	4	2	1						1	3	6	2	2	21
74	6	5		4	7	4	2			1	3	2	4	38
75	4	2	3	6	7	4	5	1	1	4	4	6		46
76	5	6	4	7	10	2	2	7	5	6	3	3		60
計	21	16	8	17	25	10	9	11	10	21	12	18		178

〔表2〕 観察回数

#### 5 調査の方法

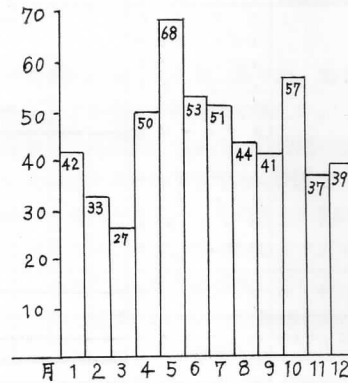
主として9倍の双眼鏡の外、肉眼、25倍のプロミナー、時刻は不定期である。

#### 6 月別出現種類数

月別の出現種類数は、観察回数と相関関係にあり、図1と対照すると、3月の27種は観察不足によるものと思われる。

〔図2〕 月別種類数の推移

通常歩いて多い時で40種。観察時間の多少にもよるが、冬季少ない時は10種しか見れない時もある。5年間に98種及び1亜種、自宅で71種及び1亜種を観察している。



(札幌市中央区円山西町491)



◆鳥に関するテレビ、ラジオの番組を紹介いたします。いずれも定期のもですが、これを機会にスイッチをひねってみてはいかがでしょうか。

〔テレビ〕「自然のアルバム」(NHK総合・日曜日午前7.15~7.30)再放送(NHK総合・水曜日午後10.45~11.00、NHK教育・金曜日午後4.30~4.45)

〔ラジオ〕「自然とともに」(NHK第1・午前6.40~7.00)再放送(NHK第1・金曜日午後11.05~11.23)

「動植物歳時記」(NHK第1・月~土曜午前8.30~8.40 鳥は水曜日、担当・柳沢紀夫氏)

◆野幌私設探鳥会を開催します。各回とも午前7時まで、国鉄大塚駅前に集合して下さい。札幌市内から参加される方は、札幌駅前から国鉄バスを利用すると便利です。

〔開催期日〕 4月17日  
5月22日 6月12日 7月3日  
(いずれも日曜日)

〔幹事〕  
羽田 恭子 (611-0063)  
柳沢 信雄 (851-6364)



#### ●表紙のことば●

ア  
ト  
リ

森  
拓  
人

札幌・真駒内に住む知り合いの人から、キレンジャクらしい群れが来ていると教えられ、半信半疑ながら、雪もよいの3月1日バスに乗って出かけました。

昨年の冬は我が家のベランダのリングに100羽以上ものキレンジャクが押し寄せ、そのすさまじい食欲にへきえきさせられたのに、今冬は全く

姿を見せず寂しく思っていたものですから、期待が懷疑を征したわけです。

しかし、期待に反し曙団地のナナカマドに群らっているのはキレンジャクでなくツグミでした。総数で100羽以上はいたでしょう。ハチジョウツグミも10羽以上はまじっておりました。そしてアトリも10羽前後、一緒になってナナカマドの実を食べていました。

今冬はアトリも少ないようで、1月末の藤の沢探鳥会でも見られませんでした。新聞では、宮城県に3万羽以上飛来したと、空を真っ黒に埋めたアトリの写真をつけて報じていました。(表紙写真はカラーネガから反転)

# 鳥の紳士録

絵と文 百武 充

## 〈コゲラ〉

キツツキは一年中ほぼ同じ場所で生活していることが多い。だから他の鳥が少ない冬の林にもいるし、動作も面白いのでたいへん親しみやすい鳥である。その中でも、コゲラとアカゲラは個体数も多く、習性も最もキツツキらしいと言えるであろう。

木に穴をあけたり、皮を剥いで小動物を探すという、手のかかる生活様式にもかかわらず数が多いのは、彼等が開拓した生きかたがよほど特殊で、競争相手が少ないからなのかと、シロウト考えて感心することがある。もっともコゲラにしても、他のカラ類等の小鳥に比べたらずっと少ないのだろう。

家の前のミズナラの幹にとりつけたブタの脂にコゲラが来るようになったのは、昨年の3月であった。はじめから2羽連れだって姿を見せたので、多分つがいだと思ったが、外見では雌雄の区別ができない。図鑑で見るコゲラのオスは後頭部に赤いところがあるが、野外でいくら注意してコゲラを観察しても赤いのが見えたことがない。標識調査で手にとって調べた人の話では、間違いなく先端の赤い羽毛が3枚くらいあるというので、なんとか確かめたいと願いながら幾日か過ぎた。

このコゲラたちは、うれしいことに大きさがほぼ同じスズメより強く、群がるスズメを押しつけて脂を占拠し長時間ねばる。しかし、スズメも遠くには逃げず、スキあらば、といった態度で幹にしがみついているのがある。そして、時折がまんできなくなったスズメがコゲラのすぐ傍に来ることがある。するとコゲラは翼をなかば開き、頭上の羽毛を逆立てておどしの姿勢をとる。

ある日、逆立てた羽毛のかげに一瞬赤い色が見えた。



そして、永年の疑問はあっけなく解決した。羽冠というほどではないが幾分長い頭頂の羽毛は、ふだんは寝かせていて、赤いところは隠れているのであった。

一度わかってしまうと、このコゲラたちは背中中の模様のおぼろげな違いから個体識別できた。やはりオスとメスであった。そして、一緒に飛んで来たとき、先に脂を食べるのは、いつもオスであることもわかった。メスが先に来たときでも、後からオスが来ると席を譲って、オスが食べている横にじっととまっている。そんなとき、しばしばリリリリリリ……という、やさしい、低い声を発して、実に愛らしいものであった。

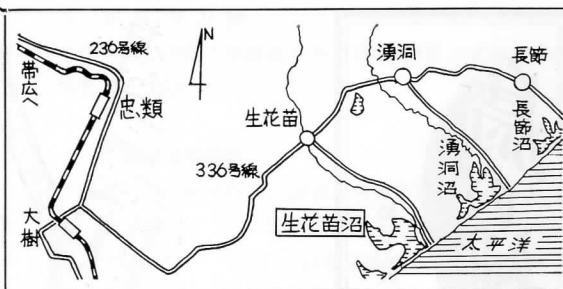
日本の鳥類図鑑のキツツキの絵、特にアカゲラ属のそれは、どの種類も同じ体型に描かれていることが多い。しかし、実際には、コゲラ・アカゲラ・オオアカゲラは頭の大きさに比較した嘴の長さや首の太さがはっきり違い、目つきにも個性がある。といて、この絵がコゲラらしく描けているというのではない。絵を描くのはぼくには本当にむずかしく、24号のハシブトガラにしても、出来上がりを見たら嘴が細すぎて、どうみてもコガラようになってしまった。それに翼のたたみ方も、実物はほとんどいつも左右の翼端を交叉させているようだ。

(川上郡弟子屈町川湯国立公園管理事務所)

# 生花苗沼

ひとりだけの探鳥会

小野 登志和



帯広市から南東に約60km、太平洋に接して位置することの大樹町の生花苗沼(オイカマナイ沼)は、隣の豊頃町の湧洞沼と共に、私達鳥友には最も大切な探鳥地の一つである。特に渡来時のヒシクイの群、まれにはコクガン、渡去時のマガン、オオハクチョウ等の観察。完全に凍結する冬季を除き、春秋に集結する各種のカモ類の大群、海洋性の水鳥、ヤマガラ、コゲラ等の野鳥たち、常に観察される数羽のタンチョウ等その内容は観察者にとってはかなりダイナミックであり、ぜいたくでもある。

生花湖(通称この付近ではセイカ湖と呼んでいる)は鳥獣保護区でないため、解禁日の10月1日以降は、舟を使っての大きかりな銃猟が行われるので、探鳥地として適さなくなるのが残念である。しかし、ここを追われた水鳥達は隣の鳥獣保護区である湧洞沼に移動するのでやや安心であるが、多数のカモ類がこの生花湖で命を落としていることを考えると、何かやり切れない胸の痛い思いがする。

さてこの日(76.4.11)ただ一人、目的地、生花湖へ向かって午前10時過ぎ出発、天気は快晴ではないがまあまあである。途中畑の雪は大部分とけていて、土のあらわれているそこ、ここより、ヒバリがさえずりながら舞い上がる情景に、この十勝にも遅い春がやっと訪れて来たなあ、という実感でいっぱいになった。

忠類市街近くを左折して少し進んだ所で、落葉松の先端に止まってじっとしている鳥が見える。何だろう、それはオオモズであった。真っ黒な過眼線が印象的である。もう少し確実に観察しようと思いつき車から出た瞬間、遠くの防風林の方へ飛んで行ってしまった。これで今期のこの種の個体数は3羽となった。

生花苗の市街が近づいて来た。今日はタンチョウに会えるだろうか。更にしばらく進んだ時、左の畑の中に何か白いものが見える。双眼鏡を通じてはっきりと2羽のタンチョウが確認された。車で50m位の所まで接近出来たので、それからゆっくり近づいて行く。タンチョウは盛んに何かをついばんでいる。昨秋この付近で別々に観察された2ペアの中の比較的若い方のペアらしい。20m位まで接近すると採食するのをやめて警戒音を出し始めた。そしてゆっくり歩きながら私と反対の方向へ遠のこうとする。思い切って更に近づくと10m位でタンチョウ

は飛び立って100m程離れた畑の中に舞い降りた。地上にいても飛翔のときも、その姿はいつ見ても美しい。

ここから約10km位離れた生花湖に向かう。目的地の生花苗漁場付近に着いたのは午前11時半頃であった。まず目に入ったのは湖面にオオハクチョウ、左の雪上に約10羽位のマガン、その近くの岸辺に7、8羽のヒドリガモがピーイ、ピューイと鳴きながら活発に採食している。早速プロミナーを取り出し観察にかかった。最初オオハクチョウから始めたところ、マガンが移動し出したのに気づいたので一時中止してマガンにかかる。私を恐れてか(肉眼では何種か判別出来ない位遠く離れていたものが大部分であったが)、採餌場を求めてか、あるいは湧洞沼の方へ移るためなのか、その原因はわからないが、ゆっくり飛び立って群を作り、少し間をおいて又1群という具合に、北西の方へ動き出し、約1時間後には私の視野からは全く姿を消してしまった。しかし飛び立つ様子といい、群の作り方、あるいは高度といい「渡り」でないことは確実のように思われる。こんなわけで飛翔中のものをカウントした。1群の数は少ないもので13羽、多いもので37羽で、群数は18数えられた。その総数は477羽であったが、オオハクチョウの観察中に移動したのもあったので、実数ははるかに上回るものと思う。

マガンの観察中、私の近くに何かが舞い降りた。見るとミコアイサの雄であった。とっさにカメラを向けたが、その動きに驚いて飛び立ってしまい、シャッターを切る間がなかった。

観察を始めてからこの間約1時間。太平洋上から吹いてくる冷たい風のため、ものすごく寒い(予想して完全武装をして来たのだが)。これでは観察を続けることが出来ない。ひとまず車の中で昼食のオニギリを食べながらいろいろ考えた。何のことはない車の中からよく湖面が見えるのである。出来るだけ湖畔近くまで近づけ、ドアの窓をプロミナーがやっと出せるだけ開けて、その後の観察を続けた。

中断していたオオハクチョウに取りかかる。逆立ちして採食しているもの、ゆっくり泳いでいるもの、頭を背中に突っ込んでじっとしているもの、何を考えてか、雪の上を面白い格好でドンドン遠くの方へ歩いて行くもの等、そのポーズは種々である。また、群を作らずに、2、



3羽ずつかなりの距離を取り点在していた。総数48羽(うち幼鳥8羽)が数えられた。しかし生花湖に注いでいるオイカマイ川にもいたようであるが、川辺のヤナギ等の灌木にさえぎられて確認出来なかった。その灌木の根本でじっとしている2羽のアオサギを認めた。

オオハクチョウの観察中面白い光景に出会った。それは1ペアのマガモ(冬羽)が、逆立ちしながら採食している2羽のオオハクチョウの周囲を、活発に泳ぎ回っていたが、そこへ群を離れて、何気なく近づいて来たキンクロハジロの雌に、マガモの雄が突然おそいかかった。相手はビックリして、何の抵抗もなく逃げてしまった。興味を持ったのでしばらく続けてその行動を観察した。

次に近づいて来たのはキンクロハジロの雄であったが、結果は前と同様、難なく追い払われてしまった。

この行動はヒドリガモにも同じであった。プロミナーにうつるマガモの雄の表情は真剣そのもの、憧れのプリンセスを守るオレはナイトであるといわんばかりに誇らしげに見えたが、ちょっとこっけいでもあった。マガモの雌は他の種に対して雄のような行動は取らなかった。

今度はカモ類の観察に移る。最初見えたヒドリガモの小群から始め、それから右にレンズを移しながらゆっくり観察する。まず目に入って来たのがキンクロハジロの大群である。いくらレンズを移動しても視野に入ってくるのはこればかり。活発に泳ぎまわるので、25倍のプロミナーではカウントは難しいので、双眼鏡に換え、100羽位のブロックをつかみ大まかに数えた。数回繰り返した結果、約1500羽位だと思ふ。次に見えたものはスズガモである。これは前種の半分位の集団であった。

その群の少し手前に約400羽のオナガガモが盛んに動きまわっている。その左に、これも400羽余りのヒドリガモが認められた。その群のはずれに1ペアのマガモがいたが、これは前のマガモの雄が示した行動は1度も取らなかった。それからカモ類の各種間の関係であるが、群と群とが接している所では他種のものも幾分入り混じるが、ほとんど同種のもので1群を形成していた。

しかし、ここから全体を見渡すとその情景は誠に素晴らしい。これに先に移動したマガンが加わっていたらなあとちょっと残念に思ふ。今日の観察はこれまで。午後3時45分、それにしてもあのマガモどうしているだろうと思いプロミナーをのぞいて見た。相変わらず2羽のオオハクチョウを中心にして、かなりのスピードで泳ぎ回っている。このハクチョウと別れる日まで毎日この行動を続けているのだろうか。帰り仕度をしていると1羽のオオジュリンの雄(夏羽)が飛んで来て、湖畔にそって海辺の方に消えて行った。

帰路車を運転しながら、何か観察を忘れた種類があったような気がしきりにするが、どうしても思い出せない。しかし確かに何かを忘れてる。しばらくしてやっと気づいた。それはカモ類である。到着時には間違いなく海辺の上を群をなして飛んでいたはずであるが、その種類すらひとつも思い出せない。ユリカモメが主体であったような気もするが確信はない。動くものなら、それが種類のわからない小さな虫であっても、しばらくはその行動を観察するくせのある私としては、全く変な話である。

(帯広市大通り南11丁目)



コウノトリ

## ① 野村 梧郎

### ◇はじめに

転勤が多かった父親に連れられ、生まれてから中学3年までの間のほとんどの期間を戦前の朝鮮半島で過ごしたため、幼時の記憶に浮かぶものは大部分が朝鮮での出来事に限られている。特に小学校に入学し5年になるまでを過ごしたのが度線に近い黄海寄りの田舎町だったため、この町での風物についての思い出が多い。

当時黄海道延白郡といったこの地域は、基層が泥炭の

水田が限りなく広く続いていて丘陵性の低い山、ところどころにある沼で自然の景観が形作られていた。この町での野鳥についての記憶は渡り鳥が非常に多かったことで、ガンカモ科の鳥類のほか、大群で飛来し越冬するナベヅルが強く印象に残っている。またコウノトリもよく見ることが出来た。幼時の記憶をたどっていくとスズメ、カラスの次にこの鳥の名前を覚えたのでないかと思うことがあるほどで、この鳥をツルとかコウヅルとか言わず、コウノトリと覚える環境で私は育っていた。

### ◇嘴打ち(カスタンネット)

この町でのコウノトリは夏鳥だった。3月下旬だったと記憶しているが、氷が融けてスケートが出来なくなつてからしばらくたち、日毎に気温が高くなって来る頃、渡り鳥の群が次々と通過していくのを見送っているうちにコウノトリが帰って来る。多い時には20羽近くもが群を作っていたこともあるが、この鳥がツルやガンの仲間のように見事な編隊を作っているのを見た記憶がない。コウノトリほどの大きさの鳥が群で渡りをするならば、それなりに形の整った編隊を組むと考えるのが常識だろ

うが、編隊を見落としていたのか、あるいは群が目的地に着いた後で編隊がルーズになった後のを見たのか、今となっては確かめようがないのが残念ではない。

渡来後しばらくたち、本当に春めいて来た頃のクオノトリが、陽気に浮かれるようにカタカタと嘴打ちを繰り返したり、大きく旋回しながら青空に吸い込まれるように高く上るのを記憶しているが、ここでも嘴打ちしながら飛んでいたかどうかの印象が定かでない。

いずれにしても春はクオノトリたちの恋の季節で、青空の奥を目指すおらかな飛翔と、大木の上に作られた巣の上で、カップルが大げさに首を曲げ伸ばす動作を繰り返しながら行う嘴打ちを度々聞くことが出来た。

#### ◇巣籠り

クオノトリの営巣木は、朝鮮の古い部落にシンボルのように生えていた巨木の頂ぎで、この巨木は大きな木が少くない朝鮮の自然の中で特によく目立ち、なにかの信仰の対象にでもなっていたのか、ケヤキなどの老木が部落の程良い場所を占め、雄姿を誇っていたものである。

この老木にクオノトリは巣を作るのだが、タンチョウのように営巣の際テリトリー意識を強く出すのか、それとも他に原因があるのかかわからないが、一本の木に2組以上のクオノトリが営巣しているのを見たことはない。

巨木上のクオノトリの巣を通常の方法で見ることが出来ないのは当然だが、一度だけ抱卵中らしい親鳥が枯枝で作った大きな巣に座り込み、暑苦しそうに口をあけて喘いでいるのを見た記憶が残っている。

消えてしまいそうな遠い昔の前後の記憶をつなぎ合わ

せてみると、その当時度々やっていた魚釣りが投網打ちの帰りだったような気がする。普段見慣れていないものを見たのだから余程遠出をしたものらしい。遠出とすれば父か兄と一緒にいたはずだが、この点もはっきりしない。ただなんとなくどっていた道が丘の中腹のような場所を通り、ほぼ目の高さにクオノトリの巣を見ることができたのは間違いなく、今考えてみると驚くほど条件の良い観察場所だったことになる。

#### ◇鴨 農

これも春の終わりのことだが、その時は父と次兄が一緒だった。たそがれが次第に暗さを増す水路沿いの道を家に向かって急いでいると、クオノトリが1羽飛び出した。揃えた両足がカモワナに挟まれている。

ワナを固定する杭は泥土の中に打ち込まれていて、ワナにかかったカモの力では抜けないが、クオノトリには引き抜かれてしまった。重くはばたいて夕暮れの中を飛び去る鳥を見送って、「何時外れるだろうか？」と幼稚な質問をしたところ、兄は「一生涯外れない」と答えた。

鉄のワナに両足を締めつけられたクオノトリは二度と無事に地面に降り立つことはできなかったはずだ。この鳥を見ての短い言葉のやりとりによって、私は生物が死に向かう時の運命の苛酷さを教えられ、生きるものの命の貴重さを覚えさせられた。

(写真は昭和51年9月16日、石狩郡新篠津村・石狩川堤外地上空で。撮影・筆者)

(札幌市西区手稲西野374)

## 野幌探鳥会

新宮康生



南高北低の気圧配置で、前日に引き続き真冬日がとけ気温がプラスになった。午前9時に国鉄大麻駅待合室に集合、道立図書館の横を抜け宅地造成地の入り口の所でスキーをはいて一列縦隊で林辺にそって進む。寒さにそなえてガッチリ着込んだが、予想がはずれて少し歩くと汗ばんできた。

ゴジュウカラとムクドリを見ただけで大沢口に着く。例年2月は鳥影は少ないが、それにしても静かすぎる。林内も今年は雪が多いが、「歩くスキー」のコースが作られているため、スキーの踏み跡が何本もできている。こういう面からも野幌原生林は大きく変わりつつあるようだ。

桂コースに入ってボツボツ鳥影が見られるようになったが、やはり少ない。鳥の姿を追っている我々一行を2

～3人の「歩くスキー」が追い越していった。

大沢園地で昼食のあと、帰りは大沢コースに入る。この頃から天気予報が当たってベト雪が降ってきた。

しばらくして前方から来た若い男性に「バードウォッチングですか？」と声をかけられ、さらに自分もこのような会が

あれば入りたいとの話をしたので、愛護会のあること、道庁の梅木さんの所へ行って手続きをすることなどを紹介した。会員が1人ふえるかもしれない。

2時に大沢口に着き、鳥合わせをして散会した。

〔日時〕 52年2月20日 9:00～14:00 曇一時雪

〔担当幹事〕 柳沢信雄・新宮康生

〔見られた鳥〕 スズメ カラス カケス トビ ムクドリ ヒヨドリ ツグミ マヒワ ウソ ゴジュウカラ ヒガラ ハシブトガラ エナガ キバシリ キクイタダキ コゲラ アカゲラ オオアカゲラ ヤマゲラ

〔参加者〕 金泉弘 土屋倫作 村田信義 羽田恭子 梅木賢俊 早瀬広司・富 柳沢信雄・千代子(順不同)  
(札幌市白石区北郷4条3丁目)

●特別○  
○寄稿●

## さらば野幌自然休養林

### ねぐらを奪われた 天然記念物

クマゲラ 熊太郎

#### ●愛護会の皆さんへ訴える

私は野幌自然休養林で生活しているクマゲラの熊太郎です。人間様は我々を「天然記念物」などというものに指定して、ことのほか手厚く保護することにしてはいるのですが、今回我々の受けた仕打ちは、保護などというのではなく虐待そのものでした。人間様の世界には人権という言葉があるそうですが、我々にも鳥権があるのです。日頃から我々野鳥の立場を理解し、同じ地球上の仲間として認めてくださっている愛護会の皆様に、実情を報告します。何卒一読のうえ、私の訴えが正しいかどうか御判断を仰ぎたいと思います。

#### ●問答無用、わが家をばっさり

それは昨年暮れも押し詰まった、12月下旬のことです。札幌営林署野幌担当区事務所の職員数人が来て、私と私の家族がねぐらにしていたトドマツの大木をばっさりと切り倒してしまったのです。

ねぐらのあった場所は、皆様方の中にはよくご存知の方もあると思います。公園内の遊歩道の桂コースで、大沢園地のすぐ近く。遊歩道から6mほど入った場所です。一昨年(50年)の夏、私と家内のケラ子が丹精込めて作った巣穴で、その年、男の子2羽と女の子1羽を育てて無事、森の中に手放してやりました。

あのときはもう毎日のように皆様方が観察に見えるので、私も家内も最初は警戒してしまいました。カメラを向けられたり双眼鏡でのぞかれるのは余り好きではないのですが、まあ皆様方が喜んで観察してくれるのでまんしておりました。しかし考えてみれば、皆様方は例外なく安心できる人間様ばかりでした。

#### ●泣いていたオオコノハズクさん

子供たちが巣立ったあと、私と家内は時々、思い出の巣穴を訪れてはねぐらにしておりました。それから一年ほど経った昨年春、私と家内はもう一度子を育てるため久しぶりにねぐらを訪れてみました。そうしたらどうでしょう。オオコノハズクさんが我が家に住みついているではありませんか。私が事情を聞いてみると「子を育て



ありし日の私とねぐら。今は懐かしい写真

るから是非貸してくれ」というのです。私もオオコノハズクさんも同じ森の仲間です。私は二つ返事で承知しました。そして私と家内は、そこから広島の方に約6Kmほど入った登満別の林に格好のトドマツを見つけ、新しくマイホームを構えました。昨年夏、そこからも子供達が無事巣立っていきました。ちょうど同じころ、オオコノハズクさんも2羽の子を育て、私どもに礼を言って大沢園地の巣穴から去って行きました。

ところがさる1月中旬、営林署の職員は、登満別の方のトドマツをもばっさりと切ってしまったのです。大沢園地のトドマツといい、登満別のトドマツといい、私と家内、そして家族にとってはかけがえのないねぐらであり、思い出多いマイホームでした。先日オオコノハズクさんに森の中で出会ったので、事の一部始終を話して聞かせました。オオコノハズクさんは信じられないような顔をしていましたが、やがて大きな目がみるみる曇り「ホー、ホー」と泣き出しました。私もその涙を見た瞬間悲しさが胸を突き上げてきて泣いてしまいました。家内も切られてしまったトドマツのわきにあるオオバボダイジュの葉陰で、長い間ひっそりと泣いていました。

#### ●自然保護よりも営利

札幌営林署の人たちが、私たちの巣穴でありねぐらにも利用していたトドマツをなぜ切ったのか、いまだに納得がいきません。私があるスジから聞いた情報によると、札幌営林署はこんなことを言っていたそうです。「問題のトドマツは枯れ木であり、風雨によって倒れる危険性がある。遊歩道近くにあるので、倒れたとき、万一

人間様に被害が加わっては申し訳ないので切った」と。

しかし、ここには半分ウソがあります。人間様に危険だから切ったというのも確かにあるでしょうが、その実、あの巨大なトドマツを材材として利用したかったのではないのでしょうか。私も長いこと森の中に住んでいるので営林署のやり方は多少なりとも知っているつもりです。林野行政は①森林管理と木材生産②国民の自然休養林としての提供と自然保護という二本柱になっているのですが、ともすれば営利を優先させる前者に比重がかかっていることは否定できないようです。

もしそうでないと言うなら、なぜ、あの大木をばっさり切ったのでしょうか。私やオオノハズクさんの立場を考えてくれたのなら、遊歩道の方に倒れないようにカスガイを立てることもできるし、針金やロープで倒れないように引っ張ることも可能だったのです。なぜ切ったのでしょうか。なぜ……。

私を「天然記念物」に指定しているのも、しょせんは人間様の勝手な感傷にすぎないのでしょうか。手厚く保護するなどといううたい文句も、信用してはならないのでしょうか。私どもが巣穴を作るための条件、それはやはり直径50センチはある枯れかかった大木です。野幌自然休養林にこの条件に合う大木が、全くなくなった訳ではありません。しかし現状では、どうして安心して巣作りができるのでしょうか。

札幌営林局では、毎年野鳥の生態調査をしたり、近々野鳥の生息状況を説明した案内板をあちこちに立てるそうですが、そんなことが我々にとって何になるのでしょうか。借越な言い方になりますが、自然保護に対する基本

的理念はそんなところにあるのではないと思います。人間様も我々鳥類も、そしてこの世のあらゆる生物は、互いの生存権を認識しながら、共存していかなければならない運命共同体なのです。

私はアオサギさんに言いました。「いつ私のような目にあうか分からないので、安心できませんよ」。アオサギさんは、私たちの受けた仕打ちを聞いてびっくりしておりました。シジュウカラ君やキクイタダキ君にもよく話をしておきました。私は家内とも相談し、近くこの地を去るつもりです。愛護会の皆様にはいろいろお世話になりました。またいつの日か遠い森の中でお会いしましょう。そのとき、私は「コロ、コロ」と鳴いて合図をしますから、そうしたら私だと思って下さい。

さらば野幌自然休養林、さらば札幌営林署の諸君。

あの森はしょせん、私たちの住むべき森ではなかったのです。  
(編集部)

## 夏鳥の初認 ②

◆札幌・羊ヶ丘 四十万谷吉郎・小川巖

3. 14 ムクドリ、4. 4 カワラヒワ、4. 12 モズ  
4. 14 オオジシギ、4. 22 アオジ、4. 24 ノビタキ、4. 25 アカハラ・クロツグミ、4. 29 アリスイ  
5. 7 コムクドリ、5. 10 イカル、5. 17 ビンズイ、5. 18 カッコウ・ハリオアマツバメ、5. 31 アカモズ

アリスイ、イカル、ビンズイ、カッコウ、ハリオアマツバメおよびアカモズは小川による記録。(以下次号)

### 〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

☆ ノルマの4号分を発行できホッとしているところです。今後も毎号道内各地域の鳥相リストを発表していくつもりですので、どうぞよろしく。編集担当幹事の「特権」を濫用し、編集委員の皆さんに大変な負担をかけてしまい、反省している次第です。(小川記)

☆ クマゲラのねぐらにしていた木が切られたというニュースはショックでした。自然の中での人間の生態の是非について、深く考える時期に来ているようです。(馬場記)

☆ 冬鳥の少ない寂しい冬でした。年によって、また種類によって渡来数に変動のある冬鳥ですが、今冬はレンジャク類がさっぱり姿を見せませんでした。私が住んでいる札幌市西区の山の手通りでもナナカマドの赤い実がほとんどそのままの状態に残っています。最近、この実をムクドリの群がついばんでいるのを見かけますが、ナナカマドといえば、すぐにレンジャクといった先入観念のせいか、どうもしっくり感じませ

ん。キレンジャクの北帰の群でも立ち寄ってくれないかなあと思ったりしています。(梅木記)

☆ 機会を得て、今年の正月休みをイタリアで過ごしました。25時間も飛行機に乗ったので着いた所はオトギの国かと思いましたが、そこにもやはり人間がいて労働があって車があって騒音があってゴミの山があって、オトギの国などではありませんでした。ところが鳥に関する事で感心したのは、どこへ行っても鳥の絵がたくさん飾ってあるということです。自然を愛し動物を愛するという意識が、日本人とはかなり違っているということを飾られた絵を見て感じさせられたことでした。(飯山記)

☆ 続けて4号発行で、今疲労を感じています。技術的な問題もありますが、組織的な問題、つまり会における編集委員会の位置がはっきりしていない等の理由もあるのではと考えています。原稿をお寄せ下さった皆様に感謝するとともに拙い紙面処理しかできず申し訳なく思っています。次期編集委員にも原稿・写真等ご協力願います。(森 記)